

シュテファン・ハイム小伝（3）

貫 橋 宣 夫

ハイムは妻とともに、ベルリンのテルマン広場にある東ドイツ政府の来客用宿泊所に入った。宿泊所は、帝国首相官房の廃墟があるヴィルヘルム通りのすぐ近くにあった。この官房からかつてヒトラーは、茶色の制服を着た大隊の行進に手を差し上げて、勝利を祝ったのだった。街は瓦礫の山であった。ヒトラーが自殺した地下壕のなごりも見えた。

ハイムは東ドイツ文化同盟の客人の扱いを受けていた。備え付けの家具はつまましいものであったが、部屋は暖かく住まうには十分であった。食事は簡素で、コーヒーは薄かった。しかし、東ドイツの一般の市民にくらべるなら、やはりいい暮らしであった。

ハイムは妻のゲルトルーデとともに街の探索に出かけた。1951年のベルリンはいまだ大部分が瓦礫でなりたっていた。ハイムは相反する気持の中で揺れ動いていた。一方では、この破壊状況を目の当たりにして、当然のことが起こったのだという気持ちである。ドイツ人はゲルニカからスターリングラードまで平然と破壊をつくしたのだ。しかし他方では、この岩屑から未来を繋ぎ合わせるには、しかもそれが社会主義の未来なら、どれだけの努力が必要かと考えるとき、課題の大きさにおののきすら覚えるのだった。

宿泊所は何と言っても仮住まいであった。なにかにつけ不便であった。

当時、エーリヒ・ヴェントは文化同盟の書記であり、アウフバウ出版社の社長であった。ハイムはヴェントに手紙を書いて落ち着いて住むことのできる住居の斡旋を依頼した。ヴェントは理解を示し、ハイムの希望を聞いた。ハイムは、どこの国にきたのか、国がどういう状況にあるのか知っている、贅沢は言わないと答えた。

芸術家や知識人に理解をもっていたグローテヴォール首相は、ベルリンの

東地区に三つの住宅地、団地を建造させていた。パンコウ地区に2カ所、グリューナウ地区に1カ所。

ヴェントは、できたら森もあるグリューナウ地区に住みたいというハイムの希望を聞き入れ、一戸建を探してくれた。後から来ることになっている息子のデイヴッドの部屋も確保することになった。

「日々週報」の編集局が、ハイムがベルリンに到着した数週間後には、一緒に仕事をしないかと要請してきた。ミュンヘンでは、アメリカの監督のもとに「新新聞」が発行されていた。「日々週報」は、これと対をなすもので、東ドイツが発行する新聞ではなく、ソビエトの責任で発行されていた。1945年にハイムはミュンヘンで、「新新聞」の発刊に関わってきたのだった。ハイムが右傾化する「新新聞」の報道をめぐってハーベと対立して、アメリカに帰ったことは周知の事実であった。「日々週報」からの申し出は皮肉な巡りあわせであった。

ハイムは「新新聞」の編集作業をとおしてアメリカの政策に異議を唱えたのであったが、「日々週報」においても問題が起こってきた。クライバー事件をきっかけに騒動がもちあがった。

かつてヒトラーに追われた偉大な指揮者エーリヒ・クライバーは、大きな出費をかけて修理された国立オペラ劇場の音楽総監督になる予定であった。しかし、ウルブリヒトが建物の正面に掲げてあった「フリードリヒ大王が、アポロンとミューズへ」というラテン語の銘文を取りはずさせたとき、音楽総監督の地位をおりた。

クライバーはウルブリヒトに抗議の手紙を書き、同時にそれを西ドイツで発表した。その手紙には、東ドイツでは、1934年のヒトラー下のドイツと同じような状況が支配しているというくだりもあった。「日々週報」編集長ソコロフはハイムに対しクライバーに答える論説を書くよう要請した。

ハイムは要請にしたがって慎重に書いた。この建物は、王侯の金で建設されたのではなく、人民によって、人民のために建設されたのだ。古い銘文はしたがって誤解を招くものである。ハイムは説得力をつけるために、クライバーの手紙の文言を付け加えた。しかし、ソコロフはその引用箇所を削除した。そのためハイムの論説は説得力のないものになってしまった。

ソコロフの言い分はこうであった。クライバーは彼の書簡をわれわれに宛てたのではなく、西側の報道機関に渡したのだ。だから、こちらで要約であるにせよ、持ち出す理由はない。そのうえ、「週報」だけがそれをやることはできない。実際、東地区の他の新聞は、クライバーの手紙を引用するのを避けていた。ハイムは反論した。もし読者に効果的な影響を与えようと思うなら、読者に判断させなくてはいけない。読者がそれをすることができるためには、読者に争点の両面を知らせなくてはならない。

全く同じようなことでハイムは「ノイエス・ドイチュラント」紙とも争った。ハイムがこの国に来てほんの数ヵ月しか経っていなかった。この種の争いは、後に再三再四ハイムを悩ませることになった。

1953年4月、ハイムは40歳になった。

アメリカに留まっていた妻の息子のデイヴッドとハイムの母が東ドイツにやって来るのを待って、ハイムはアメリカに向かって、東ドイツへ移住するという公開の声明を發した。

それは、かつて亡命者の自分を受け入れ、そして市民権を与えた国に向かっての別れのあいさつであった。悲しみ、失望、落胆が声明を貫いていた。

合衆国政府がだんだんと先鋭化させているファシズムと戦争の路線は、誠実な人間にとって、合衆国の領土の上で文筆活動をし、自分の作品をアメリカの公衆に理解してもらうことをほとんど不可能にしている。アメリカで市民権を得た作家は、次の選択ができる。FBIとアメリカのデパートとウォール街を是認するか、そしてそうすることで彼の内的な清廉性を失うか、あるいは、真実を書き、その代わりに迫害に身をさらし、迫害を体験しなければならないかである。外国で生まれたアメリカの作家にとって次の選択が現に存在する。養父役を引き受けてくれた祖国の出来事に関して、準備中の、いや、すでに始まっている帝国主義戦争に関して黙っているか、あるいは、この政策に反対するか、そして、その代わりに彼のアメリカ国籍を失うか、長期間にわたり、すでに設えられた強制収容所のひとつで暮らすか、最終的には国外追放になるかである。私はしたがって、合衆国を去った。そして、ドイツ民主共和国に、私の家族と私自身の保護を申請した。私はドイツ民主共和国政府に対し、政府が私に保護のみならず、市民権を与えてくれたことに

感謝している。

ハイムは同時に、かつての総司令官アイゼンハワー大統領に、予備役将校であるとの任命辞令とブロンズの星形勲章を送り返した。それに彼は添え書きをした。これから勲章を身につけることは不可能である。朝鮮人民に対する残忍な不正義の戦争のなかで汚された勲章を。

ハイムのアメリカへの決別宣言は朝鮮戦争のまっただなかであった。アメリカ国内では新聞等で大きく取り上げられたが、影響は長くは続かなかった。

1953年6月、東ドイツでは大きな事件が起こった。事件は、「六月十七日蜂起」とか「六月蜂起」と呼ばれている。1953年5月2日にスターリンが死去し、東ドイツの政情も不安定になり、「新しい路線」が模索されていた。重工業を重視する政策によって、消費財の生産がおろそかになっていた。労働者の不満は高まっていた。

賃金の引き上げなしに、10パーセントの労働ノルマをあげようとする政府の政策に対して、ベルリンを中心として労働者がストライキに立ち上がったのである。東ドイツの人びとは、西ドイツのラジオ放送によって状況を知り、デモはまたたく間に他の都市にも広がった。要求は経済的なものから政治なものに変わっていった。ベルリンに本部を置いていたソ連の都市司令官は戒厳令を敷き、ソ連の軍隊は労働者に襲いかかった。

この事件で、17人が死刑判決を受け、すぐ絞首刑に処せられた。1400人が自由刑を受けた。

東ドイツの政府は一貫して、この暴動は西側の策動によって引き起こされたものとの見解をとっていた。

ハイムはジャーナリストの眼をもってこの事件を観察した。

6月16日、ハイムはベルリン市街に出かけた。通りの角々にかたまっている人々に気づいた。近づいて会話を聞いた。ノルマ、ストライキ、デモなどという言葉が鋭い口調で語られていた。「あの髭の男に辞めてもらわなくては」というようなことまで聞こえてきた。ウルブリヒト書記長のことである。ふつうならどこであっても目立つ警官の姿も見えなかった。翌17日にハイムは作家同盟から呼び出しを受けた。人々が戦闘場に走っていた。ハイムは作家同盟の事務所に急いだ。

同盟の書記、クーバが作家たちの前に立って状況を説明し、マルクス・レーニン主義的な政治分析を行った。彼は上からの指示は受けていたが、外で起こっている事態には通じていなかった。外から聞こえてくるスローガン、叫び声、規律を逸した混乱は、このプロレタリアートの著名な詩人には、プロレタリアートのすべての規範から外れたものにしか映らなかった。

集まってきた作家たちはいつもとは違って従順ではなかった。何人かはうろたえていて、クーバから支えを期待していた。

アメリカ的な訓練を受けたハイムは、大通りで起こっている不祥事についてあれこれ原因を掘りさげる発言をしはじめた。労働組合は労働者の利益を代表していないのではないかと、政府の代弁者になっているのではないかと。

そこに、定評のある労働者作家オットー・ゴツェが割り込んできた。彼はウルブリヒトの個人的秘書である。彼はそこにいる一人ひとりの行動と反応を確認しながら、ハイムの労働組合批判に反論した。西側から来た人は、まずもって工場を見てまわり、この地の人々を正しく知られることをお勧めしたいと付け加えた。かつてベルリンの非合法活動の指導者だったヤン・ペータゼンをはじめ、何人かが発言した。

クーバはあらかじめ用意してきた、決議文を朗読して、同意の署名を求めた。決議文はもんきり型だった。外では騒ぎがだんだん大きくなっていった。

ハイムは、数人の委員会をつくり、新しい決議文を作るよう提案した。提案は受け入れられ、草稿が検討された。

しかし、委員会草稿はクーバによって全面的に拒否された。クーバが読み上げた決議文は党の中央委員会によって権威づけられていたからである。作家同盟は1953年6月17日という歴史的な日に、同盟としての決議をすることができなかった。

ハイムはこの事件のなかで、自分の心のなかにある憤慨の感情を確認した。この国の労働者、この国の党、この国の労働組合、この国の作家同盟に対する憤慨である。

ハイムの心境は複雑であった。東ドイツは彼と彼の家族がやっと見つけた避難所であった。ここにたどり着くには、どれだけの苦労を、どれだけの自己否定をしなくてはならなかったか。今、この最小の保障さえトランプの

家に過ぎないことが明らかになった。

大砲や戦車に賛成しないなら、今また放浪の身とならなければならないだろう。大衆には無気力が、権力者には蒙昧が残る、それを明確に認識しつつも、この国に留まらざるをえない自分に、怒りをすら覚えるのだった。

ハイムは他の作家たちと外に飛び出していった。雨が上がり、太陽が顔を出した。人々にはもう威嚇的な態度はみられなかった。国を打ち壊そうと行動していた人々は、いまや散歩をしている者の印象を呼び起こそうとしているかのように見えた。

政府のゲストハウスで知識人と政府代表の会合がもたれた。知識人側の多くは作家であった。政府代表の先頭にはオットー・グローテヴォールがいた。議長席の左端には、上級人民委員ウラジミール・セミヨノヴィッチ・セミョーノフが座っていた。ベルリンに駐在するモスクワの新しい総督である。

グローテヴォールは、社会民主主義者であった。1946年に共産党のヴィルヘルム・ピークとシンボリックな握手をして、東ドイツにドイツ社会主義統一党が生まれた。グローテヴォールは6月17日の事件の原因を解き明かした。何度も繰り返された表面的な分析だった。確かに自分たちの側にも誤りはあった、しかしそれは早期に正された、社会主義統一党が目指しているドイツの平和的統一を恐れている帝国主義は反革命的な企てにイニシアチブをとり、事件を誘導した、と。

それから彼は出席者の意見を求め、政府は出された意見を参考にしたいと付け加えた。

ハイムはそこで手を挙げた。視線をセミョーノフに向け、次のように述べた。この国の人間が彼らの機械を、生産の場を確保し、彼ら自身の労働による生産物をじっさいに食べることが許されなければならない。ドイツの分裂によって、西と東の二大陣営がそれぞれドイツ人を保持し、それぞれの前面にドイツ人を住まわせている。二大陣営はドイツ人を大事に育てる義務がある。ソビエトは、占領地域からすべての価値あるものを吸い上げていくのではなく、今からは石油、原料、生活用品やその他の物を供給しなければならない。ドイツ人の心と頭をソビエトのために獲得する試みを、それがどんなにソビエト人にむずかしくても、しなければならない。ハイムの発言は占領

者のソビエトに向かって率直で大胆なものであった。

セミヨーノフは立ち上がった。マルクス主義的な威厳のある諸概念をちりばめて、彼は反論した。「違う！ ドイツの労働者階級は認識するだろう、そしてこの認識の基礎のうえに・・・」。とうとうと自説を述べるセミヨーノフには確固とした自信があふれていた。

ハイムは思った。彼がこの国にいるかぎり、もう暴動は起きないだろう、反政府デモもストライキも。この国では平穏が支配するだろう。仕事はなされるだろうが、しかし、それはいやいやながらだ。人々は決して社会主義を彼ら自身のものとして感じないだろう。

事件はハイムの心に大きなしこりを残した。

ハイムは、この経験を「小説・六月の五日間」に描き込んだ。小説は東ドイツでは発行が許されず、1974年に西ドイツで刊行された。

ベルリンの芸術アカデミーはひとつの賞を創設した。ハインリヒ・マン賞である。

ハインリヒ・マンは1871年リューベック生まれの作家である。小説『ウンラート教授』、および三部作『臣下』、『貧民』、『指導者』で権力に弱いドイツ人を描いた。1933年ナチスに追われてフランスに亡命し、40年アメリカに渡った。50年にベルリン芸術アカデミーの初代総裁に選ばれ、東ドイツに帰る直前に死亡した。トーマス・マンの兄である。

6月17日の事件の何日か後に、初めての授与式が行われた。第一の受賞者にアカデミーの担当部門はシュテファン・ハイムを選んだ。賞金は10,000マルクであった。賞金は政府の基金が充てられた。

賞の授与には、アカデミーの総裁、アルノルト・ツヴァイクが出席していた。会場にはベルトルト・ブレヒトの姿も見えた。

ハイムは公的な表彰という制度を好まなかったわけではなかったが、この時期に賞をすんなりと受け取る気にはなれなかった。ハイムは第二、第三の受賞者、若いエッセイストのヴォルフガング・ハーリヒと詩人のマックス・ツイメリングに自分の考えに同調するよう求めた。二人は同意した。

授賞式のあいさつが続いた。一人は共和国の芸術と文化に対する理解を強調した。別の一人は順序にしたがって受賞者の業績を評価した。メダルと賞

金を渡すために三人目が立った。そのとき、ハイムは一言申し述べたいと要請した。

ハイムは三人の受賞者を代表して意見を述べた。名誉はいただくが、賞金は辞退したい。この金は6月17日の犠牲者とその家族のために使ってほしい。穏やかな驚きが会場に広がった。

授賞式は急きょ休憩となった。ブレヒトがハイムのそばに寄ってきて、部屋の外に連れ出した。ブレヒトは言った。「いいかい。政府があんたにお金をやろうというのなら、もらっておきなさい。そしてもうひとつ忠言。作家というものは金が多すぎることではないものだ」。

ハイムはブレヒトの忠告に従うことにした。ブレヒトは、この国で列から離れて踊ってはいけないと戒めたのだった。彼は部屋に戻り、ハーリヒとツインメリングのところに行き、すまない、問題を收拾する、金は受け取ると前言をひるがえした。授賞式は再会され、ハイムは、神妙に、誤解をしていましたと宣言し、不都合をわびた。

ハイムが公的な場で立てたさざ波はすぐに収まったが、それはその後にかかる大きな波の前兆であった。

本稿はStefan Heym, “Nachruf”, München, 1988に多くを負っている。

参 考 文 献

Stefan Heym, “Nachruf”, C. Bertelsmann, München, 1988

Stefan Heym, “Wege und Umwege”, C. Bertelsmann, München 1980